

図書館員の四季

本好きの一人として

三菱京都病院図書室 須井 麻由美

情報の大部分がコンピュータ化されたこの頃、この世から本が消えてなくなると言う話を聞きますが、いったいどうなるのでしょうか？

コンピュータを使って仕事をするようになってから、テレビを見るのがとても億劫になった様な気がします。たぶん、自然と、体が画面に向かう事を拒絶しているのだと思います。

もともと本を読むのが好きで、雨の日や寒い日は一日本を読んで過ごしたりもしますが、画面で一日本を読んで過ごすのは、想像するだけで肩がこります。

また、映画館で映画を見るのと、ビデオで映画を見るのも違うような気がします。映画だと2本立てでも楽に見られますが、ビデオで2本続けて見ると、3倍くらい疲れます。もし、家にミニ映写機とミニスクリーンがあったりしたら、2本でも疲れなないかもしれません。（疲れるのはきっと電磁波のせいだ！と思っているので）

ビデオ出現にも負けず、映画館は相変わらず無くならないのだから、本も電子図書と共存してうまくやっていってくれたらと願うのですが・・・

とにかく、本好きの一人として、この世から本が消えてなくなってしまう事を望みます。

あれから1年

関西労災病院 寺澤 裕子

『あれから1年』というフレーズがこちらから聞こえてきます。去年の今頃は何をしていたっけ？どんな気持ちでいただろうか。何かにつけて、去年の事を振り返ることが多くなっています。

図書室は、昨年7月に新しい書架・雑誌棚が入り、廊下での平積みの毎日を過ごしていた本達も、木製の温かい棚に馴染んできたようです。しかし、本を取り出すと、ひどい傷が残っていたりするのを見てみると、あの日のあの時間の図書室の様子を、本棚の前で想像したりしています。

本は痛がったりしないかもしれませんが、言葉を持たない物や、言葉を発しない人達の痛み、というか悲しさが充分に伝わってきます。本当に忘れてはいけないことだと。それだけに、言葉を使って言える人は声を大にして言わなければいけないと思っています。

地震以後、図書室復旧に病院内外の多くの皆様からご助力頂いたことや、どうにもならないことが多すぎた時に、多くの方々からの励ましと、ご協力を頂いて、図書室も私も立ち直ることができました。

一人ではできないことでも力を合わせればできることが、なにより嬉しかったです。本当にありがとうございました。